

世界でもまれにみる強烈な個性と独自の存在感を持ったホテルである。この秘密はラッフルズをはじめとして黎明期におけるアジアのホテル建設に心血を注いだサーキーズ兄弟に行き着く。

サーキーズ四兄弟はペルシャのイスファハン出身のアルメニア人で、1885年にはペナン島・ジョージタウンにイースタン&オリエンタル・ホテルを開業している。当時「スエズ以東最初のホテル」というキャッチフレーズで広告を出し話題を集めた。続いて87年に次男のティグラン・サーキーズが中心となり、シンガポールの地にラッフルズを開業させた。わずか10室のバンガロー・スタイルでの出発であったが、99年には現在の原型となる3階建ての本館を完成させ、シンガポールを代表する繁栄の基礎を築いた。詳しくは筆者ホームページEdition5のサーキーズ兄弟特集を参照されたい。

ラッフルズは第二次大戦時に日本軍によって接収され「昭南旅館」と名称変更されたが、戦後は再び名門ホテルとして復活している。その後1989年に全館を閉鎖して徹底的な改修がなされ、2年後の91年に以前と同じ全室スイートルームの眩い気品を備えたホテルとして再オープンした。正装した威厳のあるドアマンに導かれ正面エントランスから入ると美しい生花のアレンジメントが出迎え、白亜の大理石の床と3階まで続く吹き抜けのロビーに心を奪われる。左右にはクラシカルで重厚なレセプションとコンシェルジュのデスクがあり、正面には歴史を物語る階段が続いている。ゲストの視線と昂揚感を最大限に利用し、その計算し尽した美意識が織りなす造形レイアウトは見事と言える。

ラッフルズには伝説的なレストランやバーがある。「Tiffin Room」はホテルで一番古い歴史を誇り1899年より続くカレー料理が特色だが、最近では本格的なイングリッシュ・ハイティーが大人気で予約なしでは入れないほどだ。ちなみに「Tiffin」とはインド・パキスタン地域で「昼食」という意味である。「Long Bar」はシンガポール・スリングで名を馳せたバーで、中国人のパーティーが女性に飲みやすいカクテルとして創作したものだ。正統派フレンチの「Raffles Grill」や隣接する「Writers Bar」もロビー階にありお勧めである。そのほか3階には「Raffles Amrita Spa」があり、中を抜けていくと途中左手にジムを見てルーフトップのスイミングプールに行き着く。またホテル背後の敷地には改修後に大規模なショッピングゾーンが新設され、ギフトショップをはじめ多くのブティックやレストランで楽しめる。また、ここにはラッフルズの歴史を紹介する「Raffles Hotel Museum」も併設されている。

ラッフルズはサマセット・モームをはじめとして多くの小説や物語の舞台となり、つい最近も日本のNHKドラマの重要なシーンとして登場している。サーキーズ兄弟の情熱を掛けて目指した「アジアで最高のホテル」の夢は実現し、シンガポールのランドマークとしてその独自の個性と存在感は今後も色あせることなく輝き続けるであろう。



コロニアルの優雅な雰囲気「Raffles Grill」。正統派でかつコンテンポラリーな要素を併せ持つフレンチレストランだ

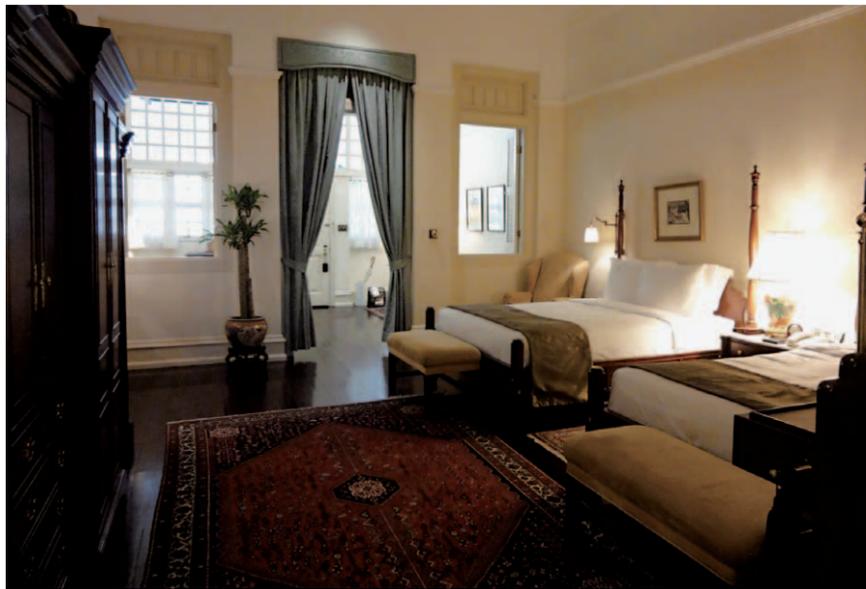


ラッフルズで一番の歴史を誇るレストラン「Tiffin Room」。1899年から続くカレー料理が有名だが、一番人気なのは午後3時半から始まるハイティーである

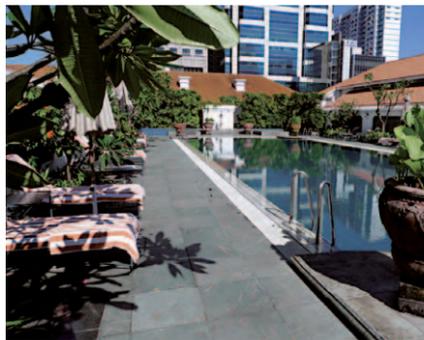


クラシカルな雰囲気のパウダールーム。十分な広さがあり左側にあるバスルームへと続いている

バー&ダイニングエリアと呼ばれるリビングから俯瞰したベッドルーム。ターンダウン後は左右の木製ルーバーと中央のドレープカーテンが閉じられる



19世紀にタイムスリップしたような贅沢かつ優雅な時が流れる客室。ラッフルズの103室ある部屋は全てスイートルームになっており、この客室はバームコート・スイートと呼ばれ60~79㎡の広さを誇る



アマリタ・スパのレセプションから右に進んで行くとスイミングプールにたどり着く。本館3階屋上にあるオープン・エアのプールで、ラッフルズの穴場の存在である



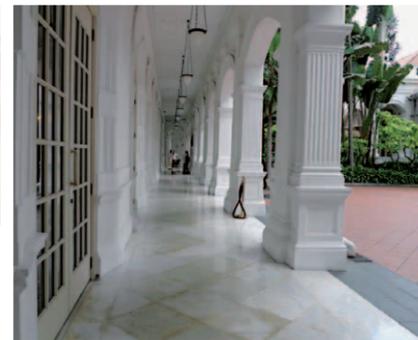
3階まで上がって行く階段脇にある「Raffles Amrita Spa」。世界中のアマリタ・スパの中で最高ランクの店と言われ、ホテルゲスト専用のスパだ



シンガポールのランドマークであるラッフルズの正面ファサード。1989年から全館閉鎖して徹底的な修復作業を終え、91年9月に以前と同じ全室スイートルームの眩い気品を備えたホテルとして再オープンした



美しい芝生の中庭バームコート。周囲を囲むように、本館からL字型に張り出したバームコート・スイート棟



何と形容してよいか迷うほどの美しさの回廊だ。本館バームコート側側の回廊で、右手にバー&ビリヤードルーム棟が見える



ラッフルズの館内に一歩踏み入ると満洒な生花のアレンジメントが歓迎してくれる。写真右手にクラシカルな雰囲気のコンシェルジュデスクがあり、左手には歴史を刻み込んだロングケース・クロックが見える



ラッフルズの歴史の重みがしみる重厚なレセプションカウンター。右側デスク背後にはキーと書類を入れる番号付きのボックス棚が見える。左側デスクは昔懐かしい銀行窓口を彷彿させるキャッシャーである



華やかなシャンデリアでライトアップされた夜のラッフルズ館内。正面エントランス3階部分から俯瞰した目の覚めるような美しいグランドロビーである



ラッフルズの顔とも言えるターバンを巻いたドアマン。正装したドアマンの威厳がホテルの格式を物語る

筆者 小原康裕

ホテルジャーナリスト。慶応義塾大学法学部法律学科卒。74年Munich Re入社。85年築地原健代表取締役。2001年投資顧問会社原健設立、代表取締役CEO。
※現在、著者のホームページで「世界のリーディングホテル」を連載中。多くの美しい写真と興味深いコメントで、世界中のホテルとそれ関連都市を紹介。ホテルだけでなく、オリエントエクスプレスなど鉄道関係の掲載、季節刊行で世界遺産の案内などさまざまな情報が得られる。
www.jhrca.com/worldhotel

